

多和田真淳調査収集の考古資料（V）

多和田 真 淳・知 念 勇

1. 野国貝塚群

発見 1955年 多和田真淳

本貝塚群は、嘉手納町字兼久下原に所在する。国道58号線に沿った石灰岩台地とその前に広がる海岸砂丘地に立地する沖縄編年早期、前期、後期の複合遺跡である。地点によって、時期が異なることから、A、B、Cと3点に呼びわけている。

そのうちA、C地点は、多和田が発見した遺跡であり、A地点は海岸側砂丘地の後期貝塚で、C地点は国道添いの石灰岩台地上に立地する前期の貝塚である。^{注1}

A地点の後期貝塚が1959年2月米国の考古学者T・B・バード、同G・F・エクホルム両博士によって発掘調査が行なわれた。その結果土器などの多くの遺物とともに、中国唐代の開元通宝が出土して注目された。A、C地点の遺跡が沖縄の先史時代を考えるうえで重要であるとして、県指定の史跡に指定されているがその後採砂などによって大半破壊された。

B地点は、その後、高宮廣衛、嵩元政秀の両氏によって、^{注2} C地点の北側に発見された。高宮によって採集された縄文時代前期の土器が紹介されている。また新田重清氏もここから採集された土器を縄文時代前期の曾畠、轟式系土器として紹介している。^{注3}

B地点遺跡は嘉手納基地内からの排水路改修工事に伴なって、1981年1月から教育庁文化課による緊急発掘調査が実施された。その結果、読谷村渡具知東原遺跡と同様、縄文時代早前期の爪形文土器と条痕文土器などが出土し注目された。その成果については報告書が刊行されている。^{注4}

以下1955年に採集されたA、C地点の遺物を紹介する。

土 器

土器は口縁部、有文胴部、底部などを第1図と第2図に示めた。採集された土器は、すべて小破片で器形の復元できるものや口径推算の可能なものはない。

第1類は、図2、12、19、20、で、口縁部が直交するカメ形の土器で両面とも良く調整され、胎土は粒子がこまかく、精選され石灰岩細粒と光沢を有する黒色の粒子が混入

(★たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)
(★★ちねん いさむ 沖縄県立博物館学芸員)

している。同部の厚さは同図2の1.2粩をのぞくと、6～7粩である。器色は黒色の至黒褐色である。

第2類は、図3、4、6～10、13～16、18、図21、22、29の14個である。その特徴は口縁部が外反し、口唇部が平口をなすカメ形の土器である。焼成は良好で、後期の土器一般にみられるごとく硬質である。器色も第1図8が黄色である他は、茶褐色または赤褐色となる。9は口頸部から胴部にかけて、浅い曲線文が施されている。胴部に張のある土器である。胴部の器厚も6～7粩と平均している。胎土には石灰粒が混入する。

図の5は、口唇部が円味をもつては第2類と類似する。同11は、口縁部が内湾する鉢形の土器である。器厚は胴部が8粩と多少厚目で焼成は良好である。器色は茶褐色または黒褐色となる。

図4は、口縁部が円く肥厚して折曲げられている。多少外反するとみられるが破片が小さくて良く把握できない。表裏面茶褐色をなし、表面はアバタ状をなしゴツゴツしている。芯部は黒色、器厚は口頸部で5粩である。

図の23～25、28が有文の土器である。図23は口頸部から胴部にかけて、幅7粩の横捺文が2条施されている。口縁部が直交する平口のもので、焼成は良く硬い。赤褐色で胎土には、石英粒が多く混入する器厚5粩の土器である。

同図24は、口頸部から胴部にかけての破片とみられるもので、横位の横捺刻文が1条施されているが、23に比して、深く引きづっている。全体的に黒褐色で多量の石英粒を含む。器厚5粩の土器。

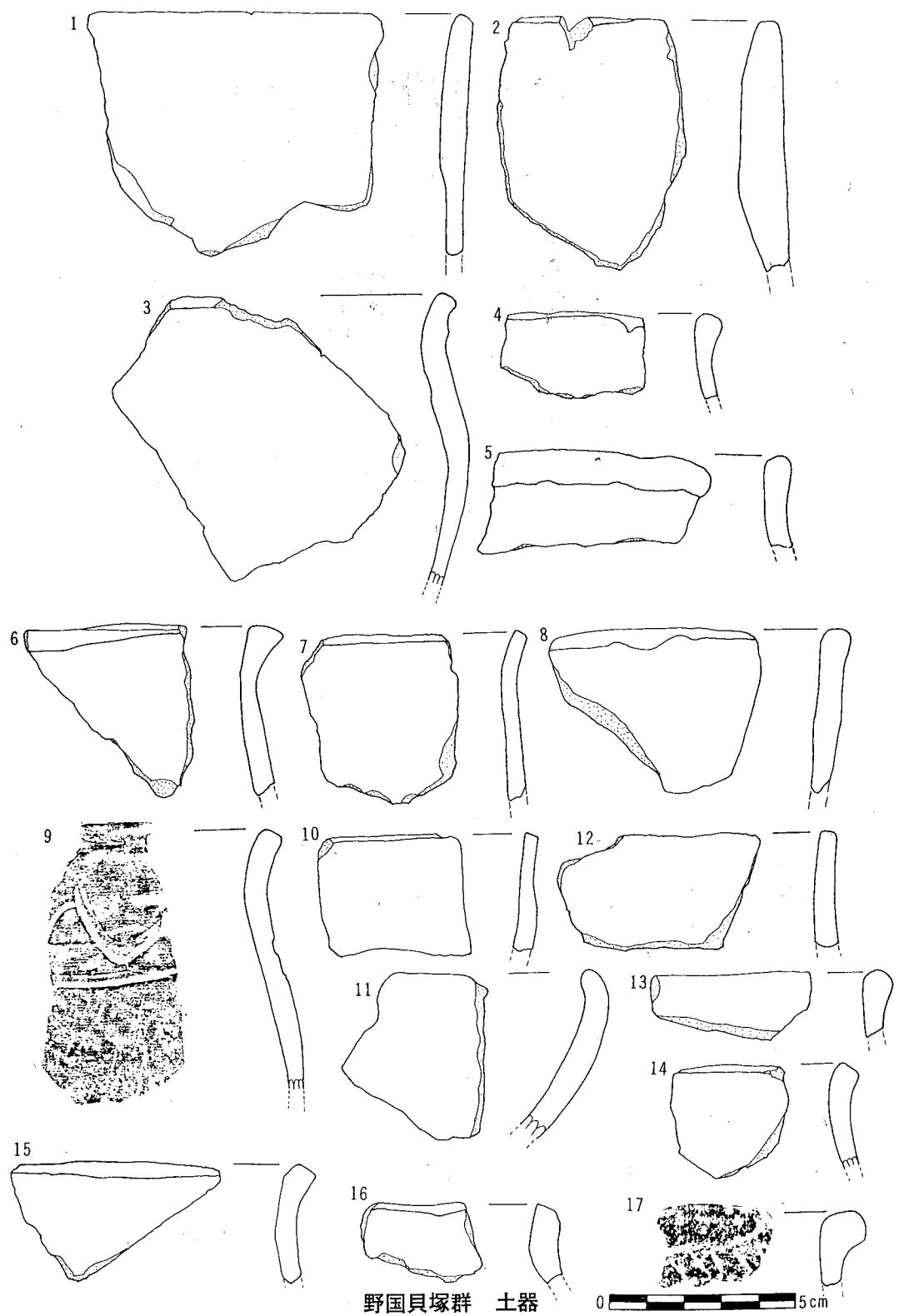
同図25は、口頸部片とみられる土器で、二本の交錯する細沈線文が施されている。表裏面ともよく調整されなめらかである。芯部は黒色であるが表面は茶褐色である。石灰岩粒を含み器厚5粩。

同図28は口頸部に横捺刻文と短沈線文が施されている。全体的に赤褐色を呈し器面は手ざわりがザラついている。石英粒を多量に混入する。

同図26、27は、口唇部が尖ったタイプのカメ形土器で、26が外反するのに対し27は内湾する。26は褐色で27は黒色である。焼成は良好で胎土には石灰粒が混入する器厚5粩。

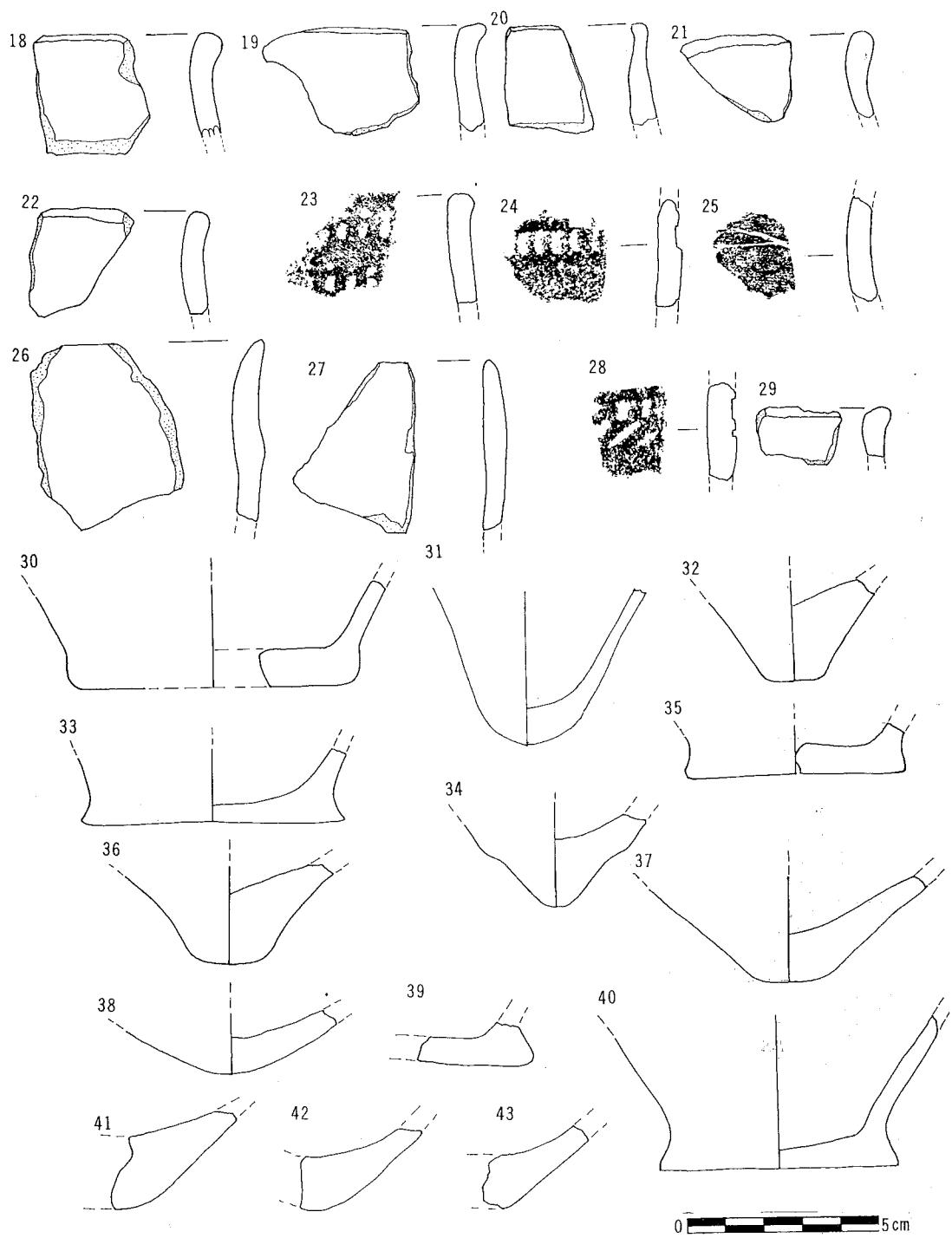
底部は13個あるが、胎土焼成などからみてすべて、前述の第2類に属する。これ等はくびれ平底といわゆる乳母状尖と円底に分けられる。

同30、33、35、39、40はくびれ平底土器である。30は底径7.7粩で褐色を呈し、内面は条痕を有するのが特徴である。底部の厚さ1粩。同33は底径7粩、全面褐色で焼成が良く硬質である。底部の厚さ8粩。同35は底径5.8粩と小さめの土器である。器色は暗褐色で底部の中心部が薄くなっている。器厚6粩、底面がなめらかになっている。同39は小片のため底径は不明、茶褐色を呈する。表裏面とも調整が荒い。上げ底的となっている。



野国貝塚群 土器

0 5cm



野国貝塚群 土器

底部厚6粁。図40は、底部はほぼ全面的に復原される資料で唯一のものである。底部から胴部への移行部が外傾するため、胴部が膨らむカメ形土器とみられる。内外面ともよく調整され、なめらかである。内外面は褐色で芯部が黒色、底部の厚さ7粁である。底径6粁。

いわゆる乳母状尖底は、図31、32、36、34、42、43がある。胎土焼成は、口縁部の第2類に属する。31と32は外面が褐色であるのに対し、内面は黒色である。32は底部厚2粁の厚底である。

図37、38、41は円底であるが、胎土、焼成などは第2類と同じである。

以上の土器からみると、今回紹介した中では、同23、24、28が前期後半の大山期に属し、図17が中期末で、第1類の土器は後期初頭のもので、その他はいわゆる沖縄編年の後期後半に相当する。前期後半から後期終末までの時期に比定され、A、C地より採集されたものと考えられる。

石 器

図44は、はまぐり形をした石器で、図の上端裏面が敲打による欠落がある他は、表面は研磨が施されている。図の下端部も敲打痕がみられる。量大長8粁、最大幅7粁、重量290g。石斧の破片とみられるが小片のため確定はできない。全面研磨が施されていたとみられる。図下端部の刃部とみられる箇所は磨耗が著じるしい。重量87g、石質は輝緑岩製。

貝 錘

リュウキュウザルボウガイとメンガイの殻頂部に穿孔した貝錘がそれぞれ2個ある。図46はメンガイ製、穴幅1.7粁、重量16g。図47はメンガイ製、穴幅1.4粁、重量17g。いずれも全面的に磨耗しており、腹縁部、輪脈がすりへっている。

図48と49はリュウキュウザルボウガイで、48は穴の幅1.7粁、重量17g。図49は、穴幅4粁と小さいが重量は32gと重い。いずれも全面磨耗し、腹縁部、輪脈がすりへっている。

2. 川田原貝塚

多和田真淳 1954年6月30日 発見

本遺跡は、多和田が設定した川田原式土器の標識遺跡である。川田原貝塚について、当時の状況を多和田は次のように記している。^{注4}

三和村（1961年糸満市に合）真栄里の川田原にあって、田地を前にし川田川という泉をひかえ海岸に近い低地にある。宇佐浜、具志堅、牧港と条件の似ている所で、最も牧港に近縁を有する貝塚である。土器は一たん造り上げた後ヘラ様のもので、かきとったり、珊瑚礁見た様なもので、たたいたりして、粗ぞうでないものの中には退行した沈線文や具

志堅貝塚と共に南九州系の円曲線を用いた沈線文も極稀に出土する。又把手の部分と思われる所に目じるしとして円曲線等の特別な貼付を施したのが極稀にあるがこれは久高島のアゲンハミ貝塚や久米島のウルル貝塚のものと一致する。土器底は乳房状尖底が多く（これを川田原式と命名する）それから変化した揚底様のもの（これは尖底部の尖端を指頭で圧した為に出来る）或は尖端部を平たいものに圧しつけ底部は平面になっているが側面が湾曲しているもの……川田原系は多くカメ形土器で口縁部は僅かに反ったもの或は喜念式の内部有段口縁をなすものも多く出土する。口縁部は少し反巻したものが多いが皿形と思われるものはかえって内曲する傾向があり、その場合には口唇部は低平でなく鋭角になることが強い。

現在本遺跡地には田地ではなく畠地と草地となっている。この地域の農地改良事業が実施されることになり、遺跡の範囲確認調査が糸満市教育委員会によって実施された。調査は、1985年9、10月の2ヶ月間実施されたが、遺物包含層はもちろんのこと、川田原貝塚に関わる人工遺物も全く発見されなかったようである。この一帯はもともとは、砂地であったが、採砂されたあと、泥板岩（クチャ）などの土に入れ変えられたようである。したがって、貝塚はすでに湮滅した可能性が強い。以下発見当時に採集された遺物を紹介する。採集された遺物はすべて土器のみである。

土 器

本貝塚採集の土器は、すべて小破片であり全体形をうかがえるものはない。口径の推算ができるのが図50（口径19.4粩）と図51（口径23.6粩）の二片だけである。

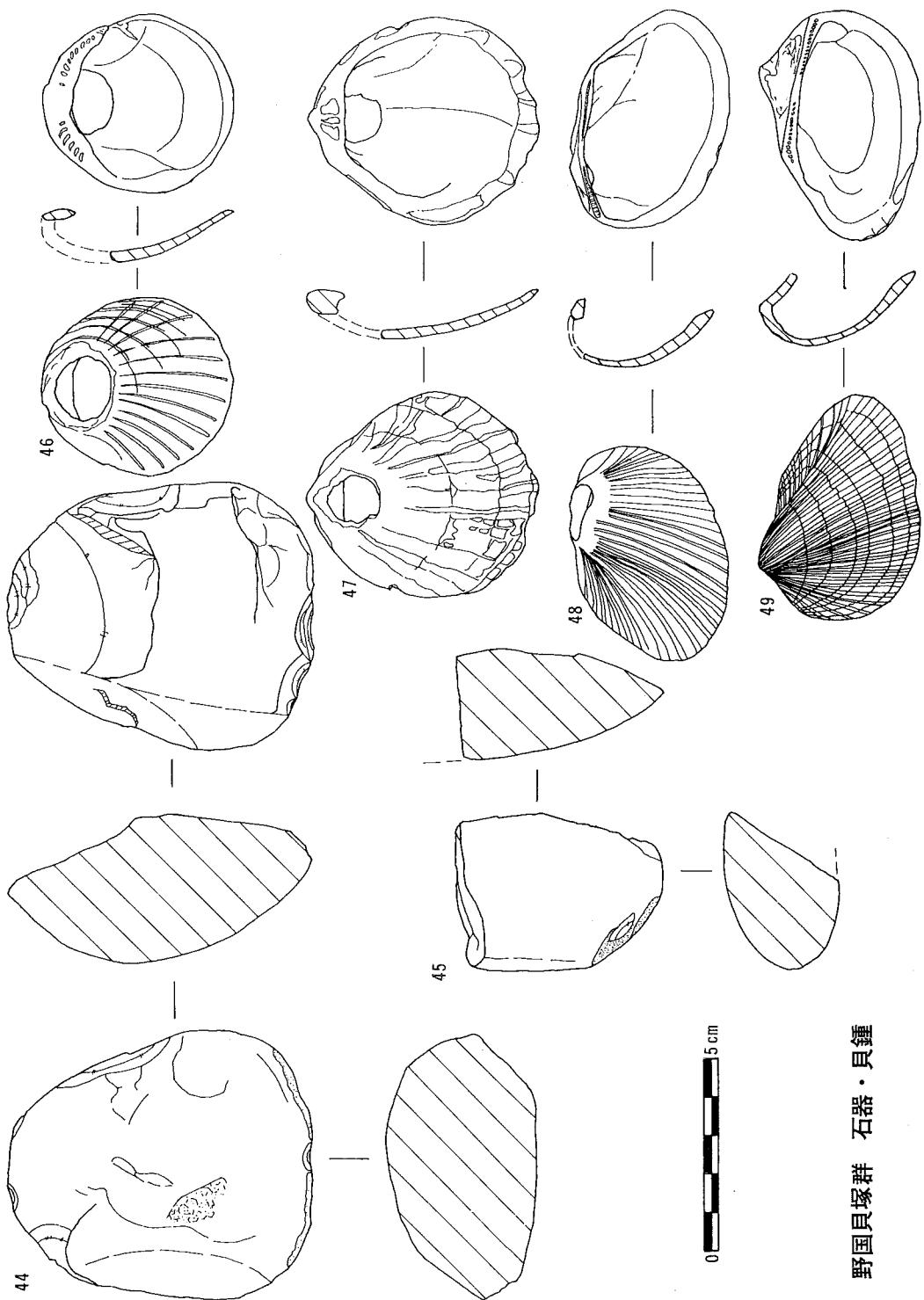
全体的にみて、口唇部が尖るか円味をもつものが圧倒的に多く、平口をなすもの図68、70、73と少ない。器形は外反するカメ形（図50、58、69～72）と、内湾する鉢形または碗形（図51、52、56、66、73～75）に大別できる。

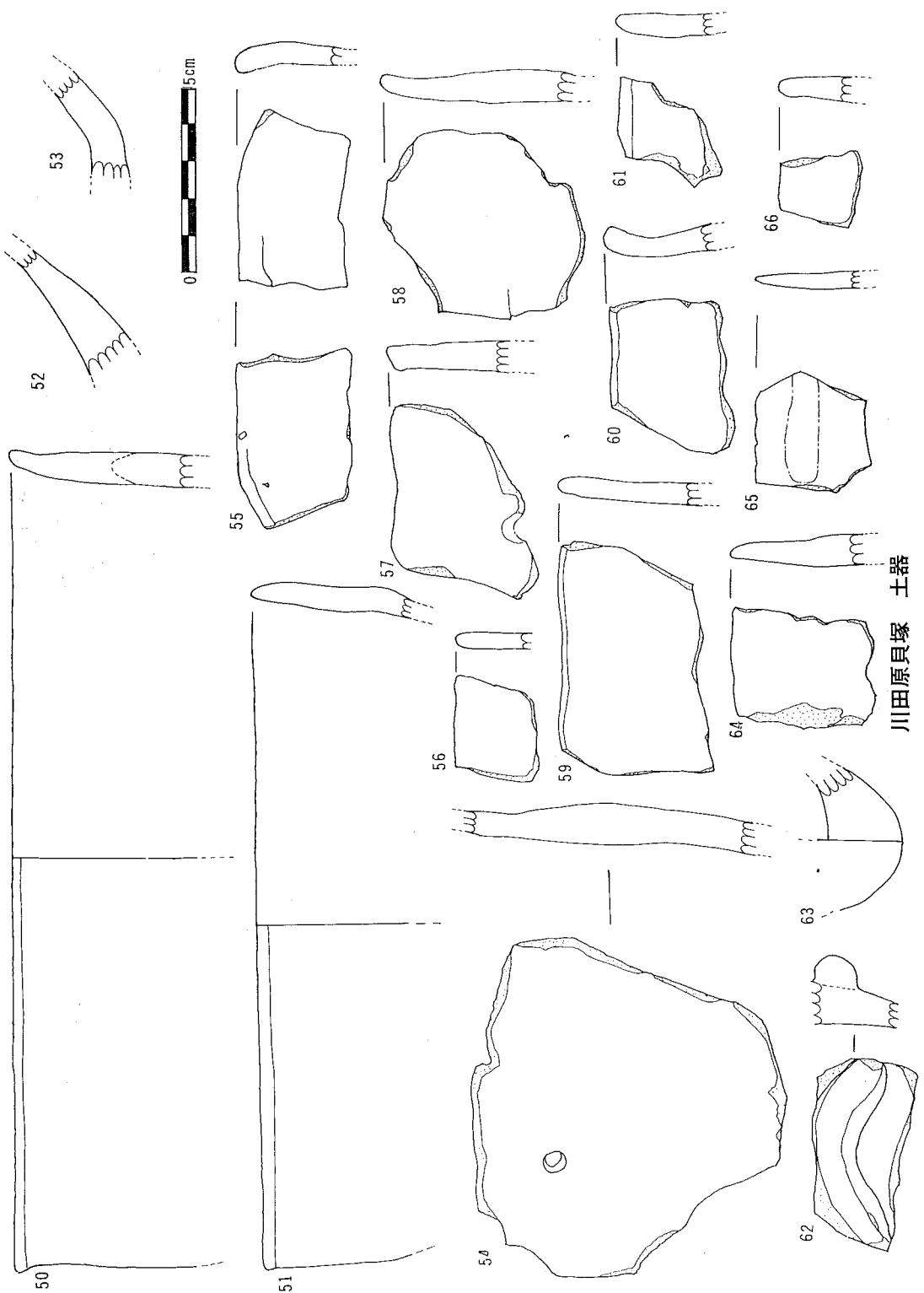
この他に胎土とそれに含まれるテンパーや焼成などによっても2タイプに分類できる。石灰粒を多量に混入し、器の表面がアバタ状になるタイプと混入物が少くなく、緻密で焼成が良く硬質な2タイプに大別できる。図50、54、55、65、73が前者のタイプに属しそれ以外は後者のタイプである。器色は全般的に褐色を基調とするが、図67、68は黒色となる。器厚も5～7粩と平均しているが、図54のように8粩と厚手の土器もみられる。全般的にみて口縁部から口頸部は薄いが胴部から底部にかけて厚くなる。

図54と57は穴が穿たれている。図69は口縁部から頸部にかけて、細沈線文が2条みられる唯一の有文土器である。図62は幅8粩で厚5粩の半月形をした把手状のはりつけがみられる土器である。同類の土器は、那覇市崎樋川貝塚の後期貝塚からも採集されている。^{注6}

底部は、尖底と尖底を押しつぶした、いわゆる乳母状尖底、それにくびれ平底がある。

野国貝塚群 石器・貝鍾





川田原貝塚 土器

尖底は図52、53、78、乳母状尖底は図63、77、79、80、81で、くびれ平底は図76である。乳母状尖底の川田原式が主体を占めている。前述の口縁部との関係からみると、図78だけが石灰岩を多量に含むタイプである。器色は内外面とも褐色となるが、図77～79は内面が黒色となる。

本貝塚は前述したように湮滅した遺跡であり、発掘調査による土器の編年は不可能となつたが、採集土器からみると少くなくとも3時期にまたがるとみられる。

具志堅新里洞穴遺跡

発見 1954年 多和田真淳

本部町字新里の西端の畠地内にある洞穴遺跡である。この洞穴は古生期石灰岩にできた堅穴式の洞穴である。

本遺跡については、これまで報告されたことはないが、出土遺物には、1954年5月24日の採集であることが明記されている。

土 器

図82は口縁部が外反するカメ形土器。口頸部から胴部にかけて三本の曲線文がみられる。褐色を呈し器厚が8耗と厚手である。胎土には少量の砂粒が混入し、表面は良く調整されている。口径推算24.8粂。

図83は口縁部が外反し口唇部先端が尖るカメ形の土器。口径推算27.5粂である。器面は内外面とも黒色で、胎土にはチャート細片を混入する。器厚1粂と厚手の土器である内外面には指頭痕と内面にはハケ目の調整痕がある。

図84は口縁部がわずかに外反し口唇部が尖るタイプのカメ形土器。口径推算21.3粂胴部の厚さ1.1粂と厚手の土器である。器色は内外面とも赤褐色であるが芯部は黒い。胎土には砂粒を混入。

図85は口縁部が外反し、口唇先端部が尖るカメ形の土器。頸部に浅い曲線文が1本みられ表面に指頭様の文様がみられる。全面黒色で器厚は6耗、前述3個に比して薄手で、焼成も良く硬質である。胎土には砂粒が混入する。口径19.8粂。

同図88は口頸部が有文土の器である。幅4耗の浅い曲線文が図の右上と左下にある。器厚8耗、器色は全面的に褐色を呈する。胎土には砂粒が多く混入する。

図90は、唯一の平口をなす口縁部でわずかに外反するカメ形土器である。器厚7耗で褐色をなし、胎土には多量の砂粒が混入する。図89は内面にハケ目の調整痕がある。器厚9耗と厚手、表面褐色で内面は黒色。砂粒が混入。図91は、波状の曲線文を有する胴部片。器厚6耗、器色黒褐色で砂粒を多量に含む。

図86、87の底部が2個あり、86は乳母状尖底を上げ底にしたもので、87は典型的な乳母状尖底である。

石 器

石器は、第8図に示した3個がある。図92は石鹼状をした磨石である。全面よく研磨されており、図の上端と下端に敲打痕が残っているため敲石としても使用されたと見られる。石質がチャートで硬質の石が使用されているのはめずらしい。最大長11.2厘、重量680 g。図93もこれと同じ磨石片である。石質は緑色片岩製。

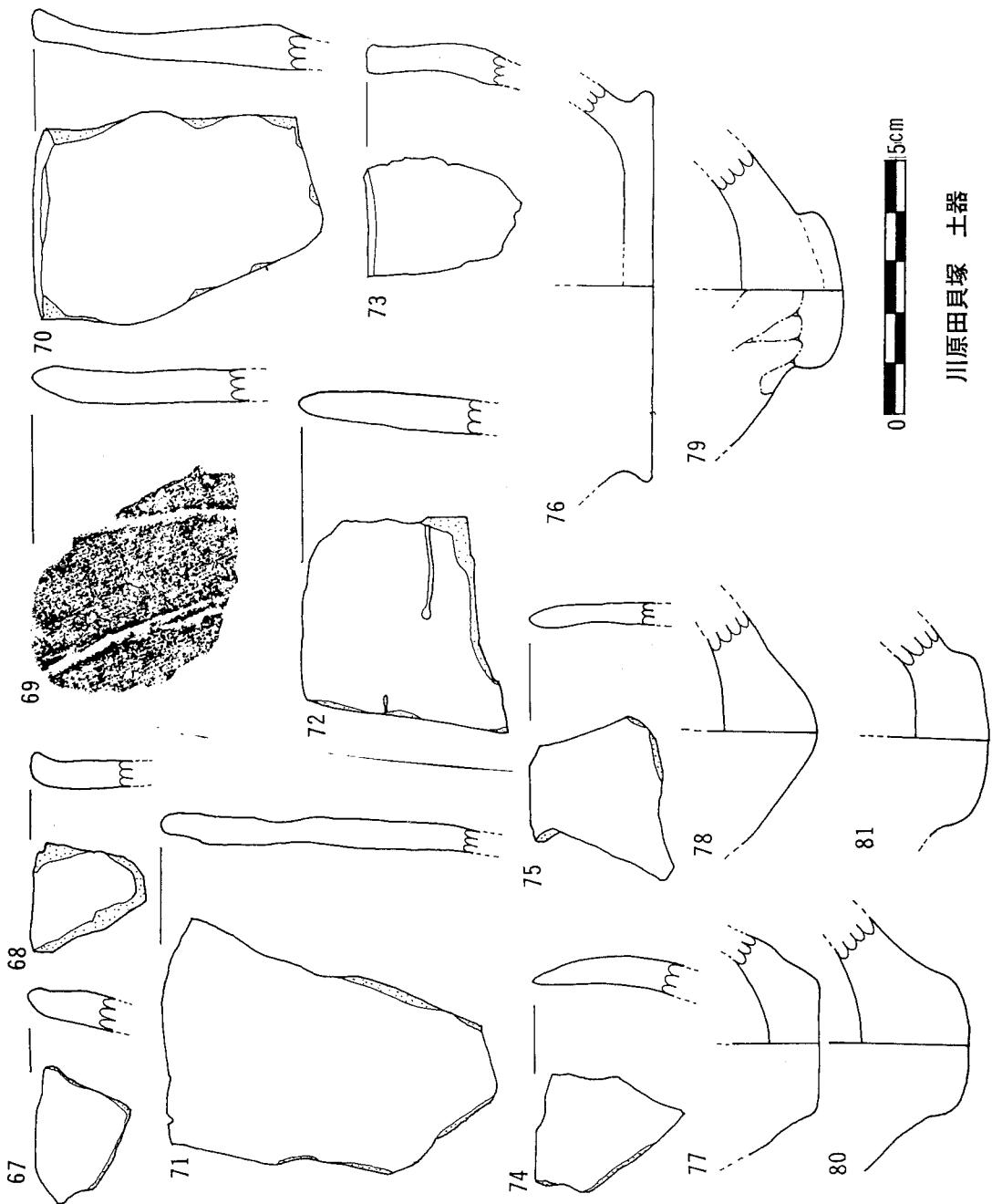
図94は、チャート製の石器で、図の上端と下端は自然面を残している。図右側の左側面は、剥利調整され右側面は鋭利な面を残している。刃部にはこまかい調整剥利がみられる。最大長8.2厘で重量375 gである。

文 献

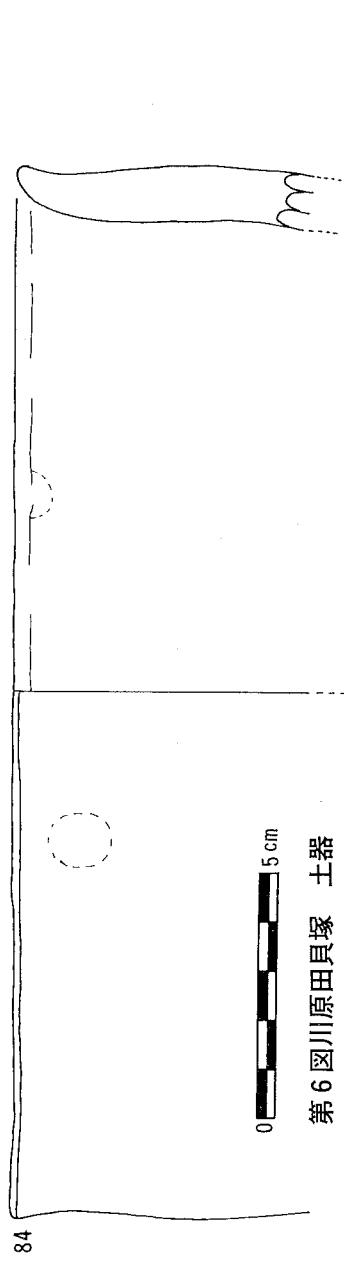
- 注1 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧』1956年版。
- 注2 高宮廣衛「嘉手納村野国B地点発見の土器」『沖縄国際大学文学部紀要』沖縄国際大学文学部、1976年3月
- 注3 新田重清「原始古代の沖縄」『沖縄県立博物館紀要第3号』沖縄県立博物館、1977年3月
- 注4 注1に同じ。
- 注5 『野国貝塚B地点発掘調査報告』沖縄県教育委員会、1984年3月
- 注6 高宮廣衛「那霸市の考古資料」『那霸市史』資料編第1巻1那霸市、1968年

川原田貝塚 土器

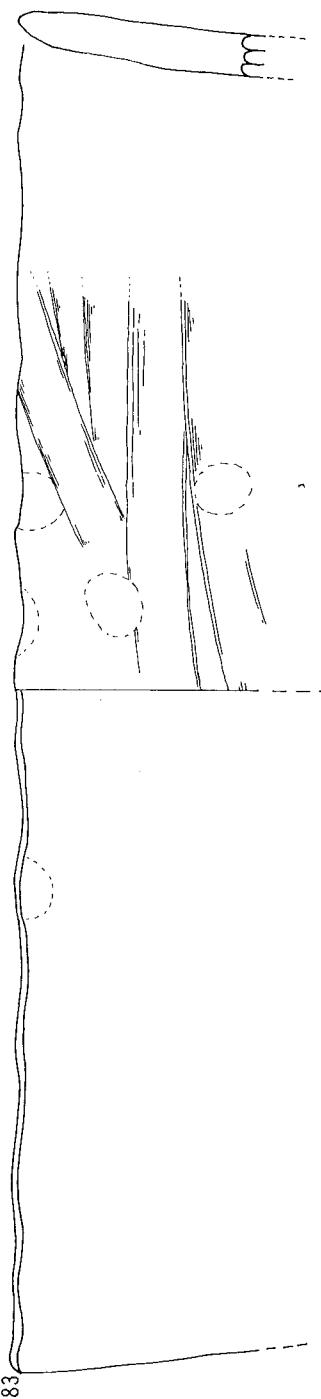
0 5cm



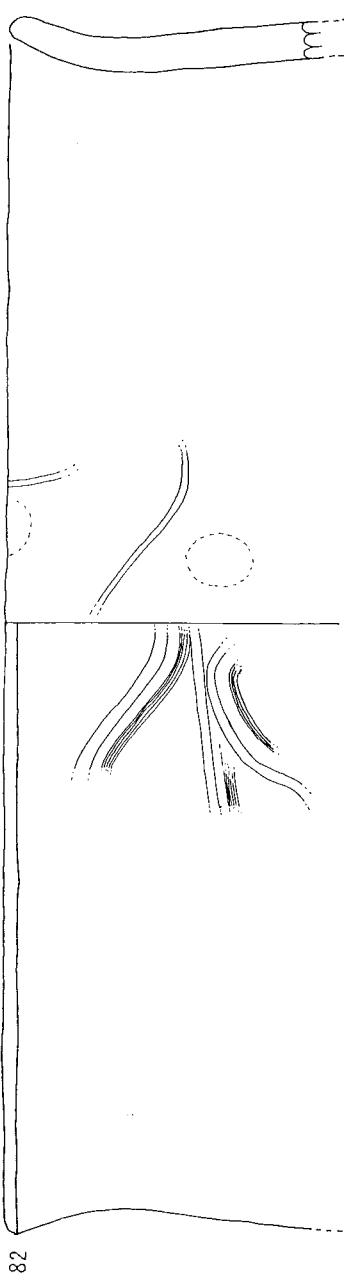
第6 図川原田貝塚 土器



84



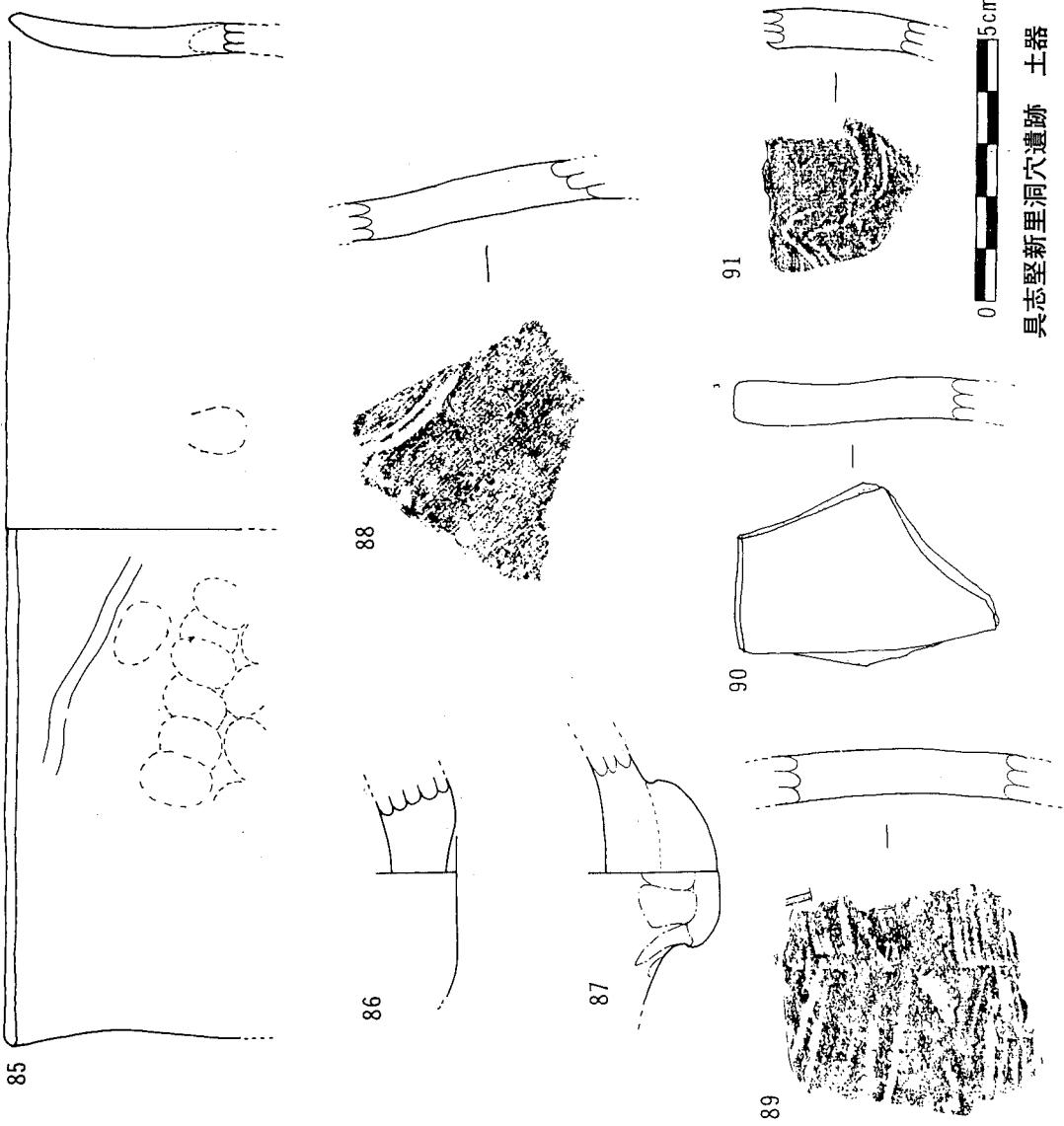
83



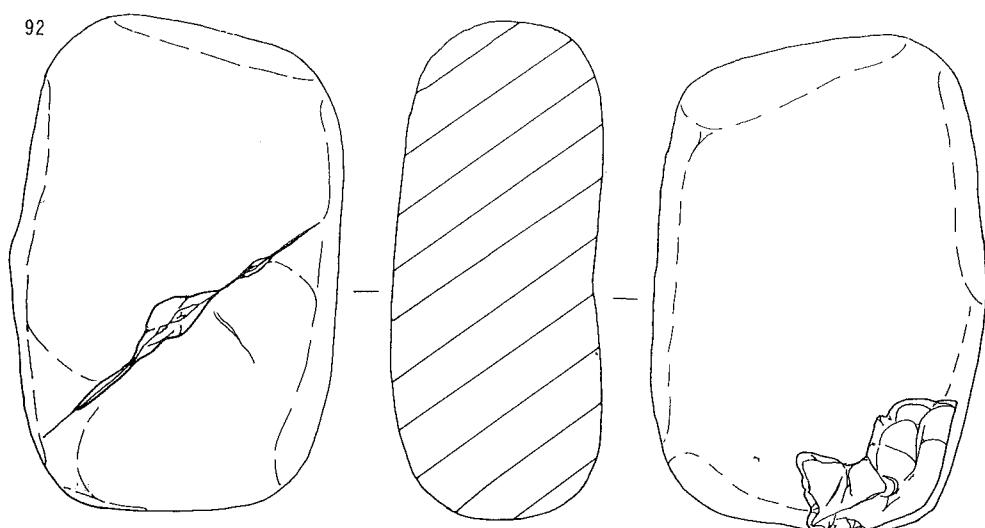
82

具志堅新里洞穴遺跡 土器

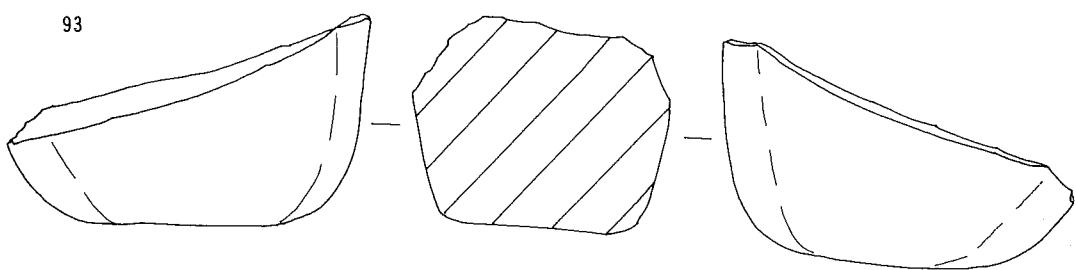
0 5cm



92

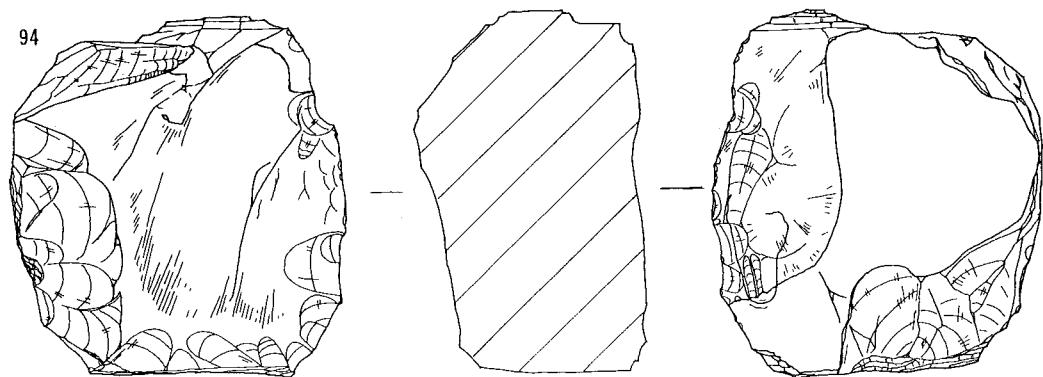


93



0 5 cm

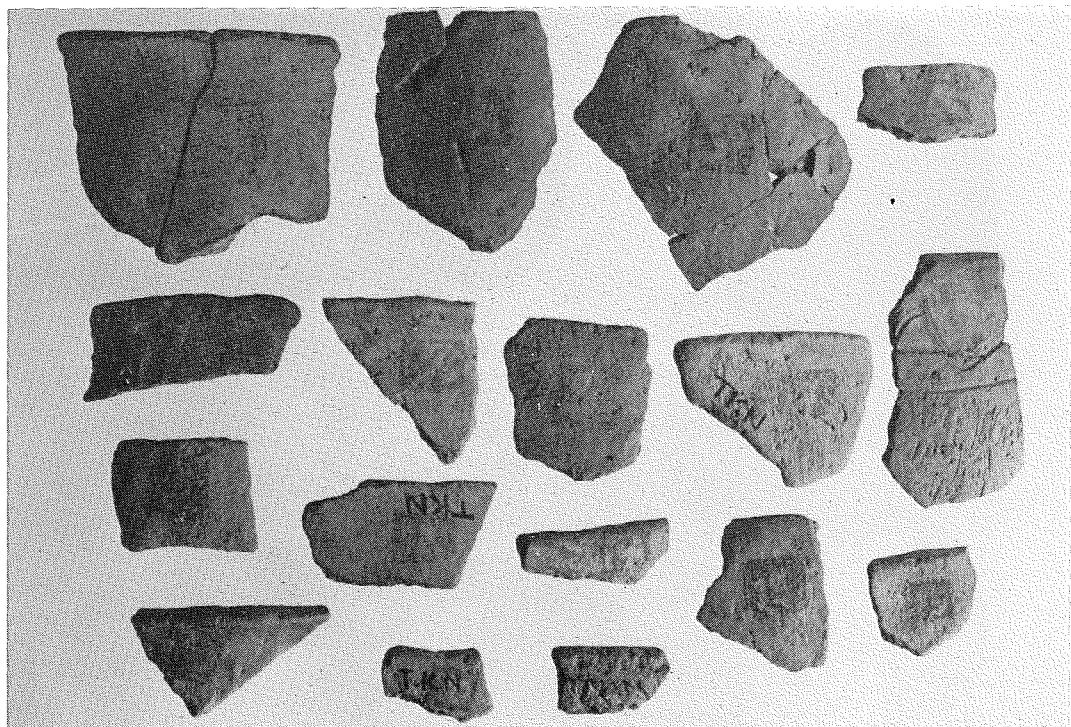
94



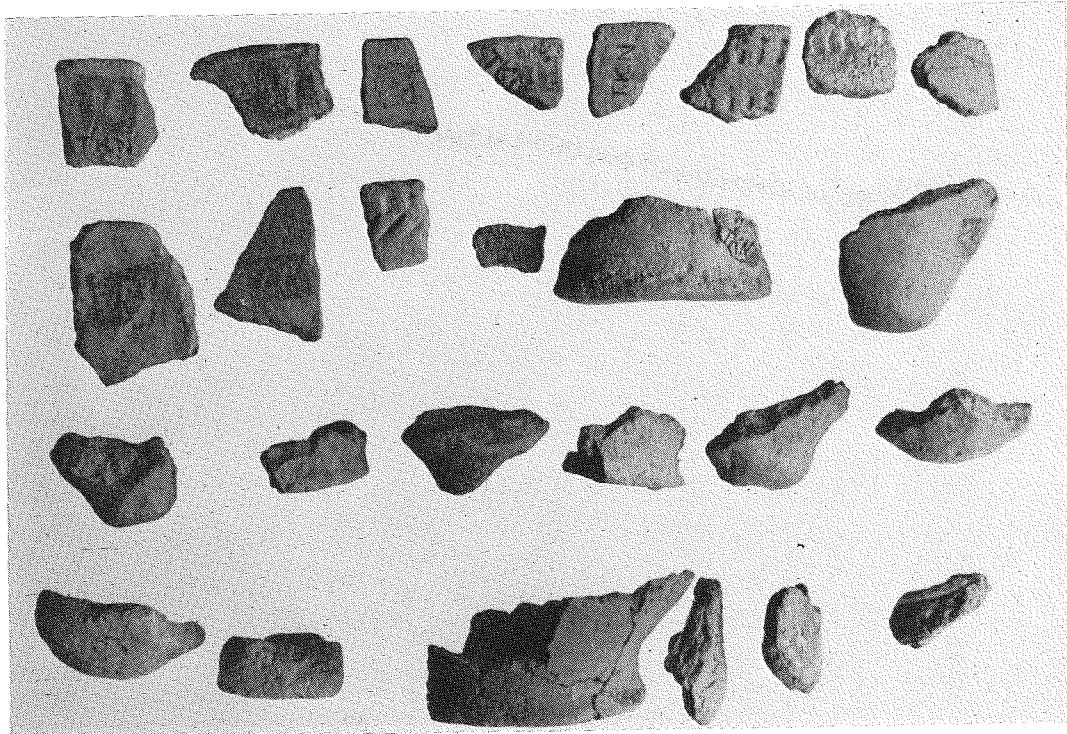
具志堅新里洞穴遺跡 石器



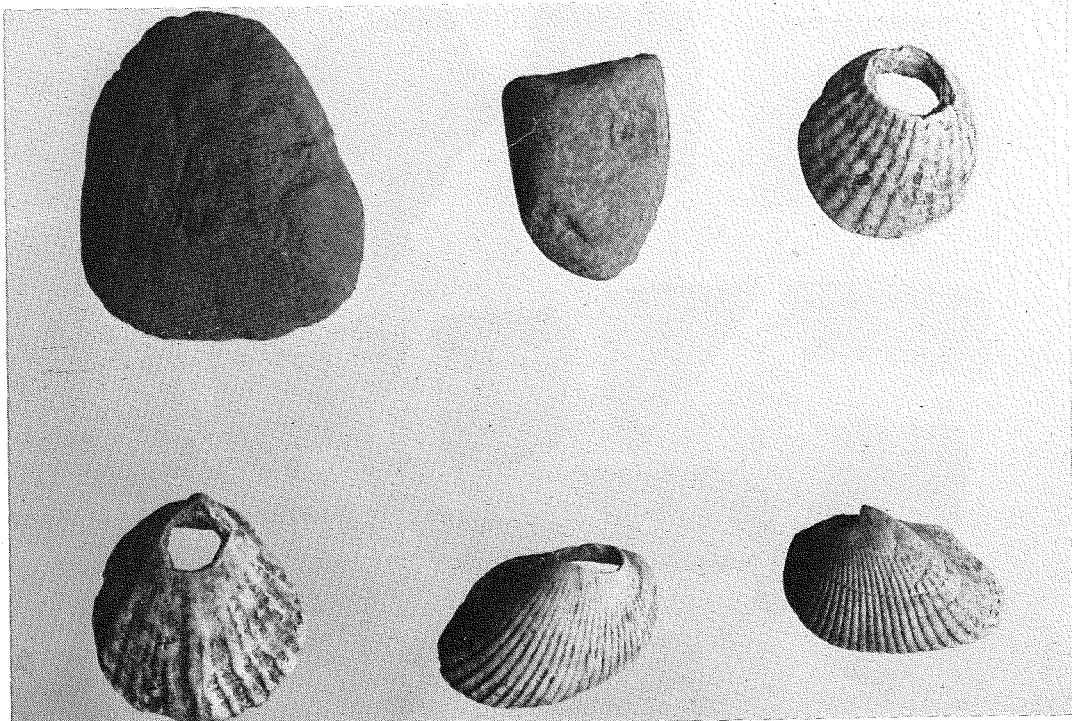
第1図版 発見当時の川原田貝塚（貝層）



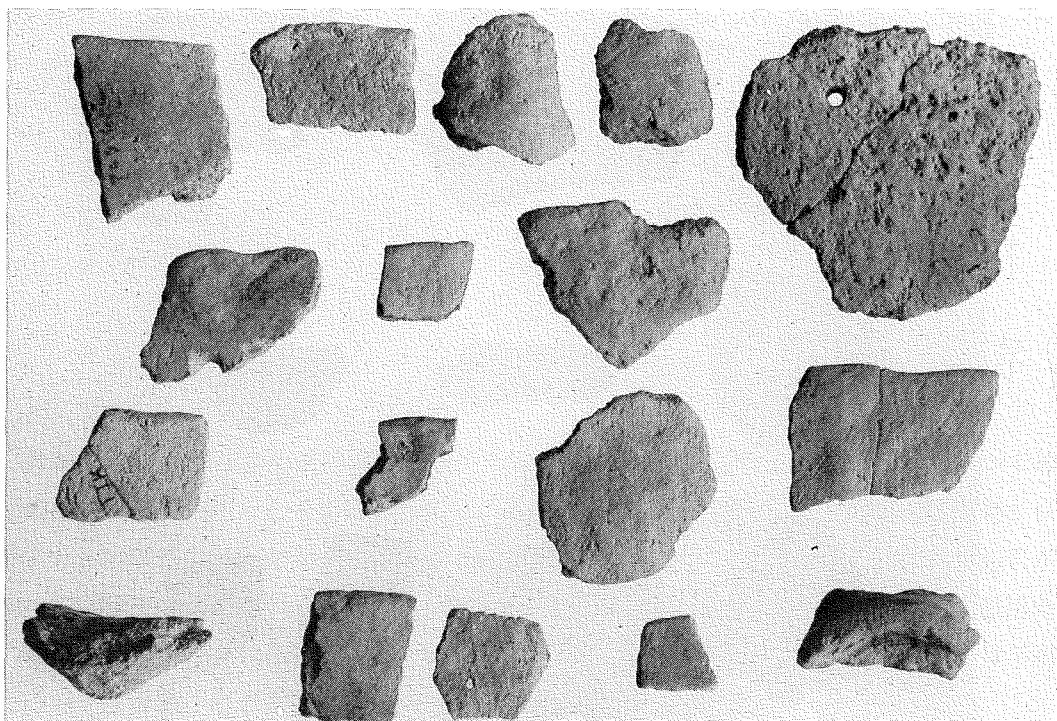
第2図版 野国貝塚群・土器



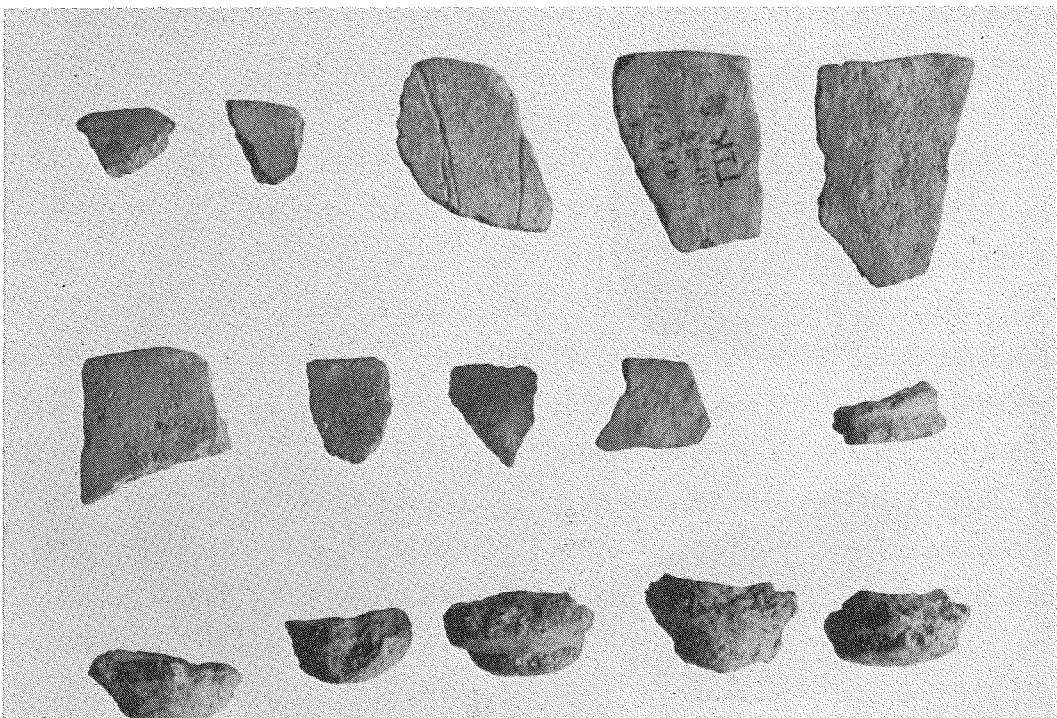
第3図版 野国貝塚群 土器



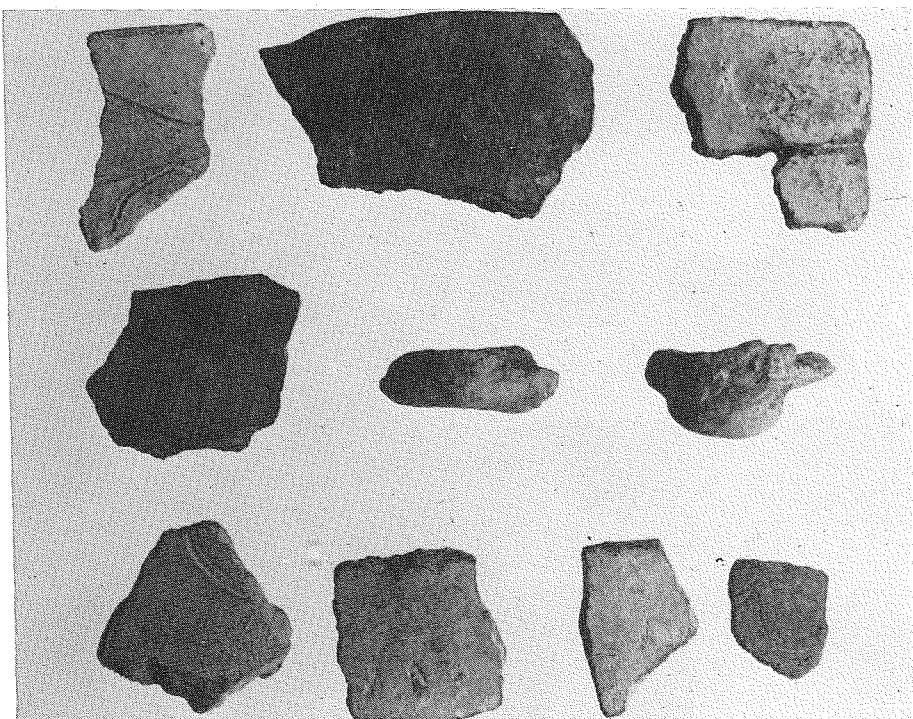
第4図版 野国貝塚群 石器・貝錘



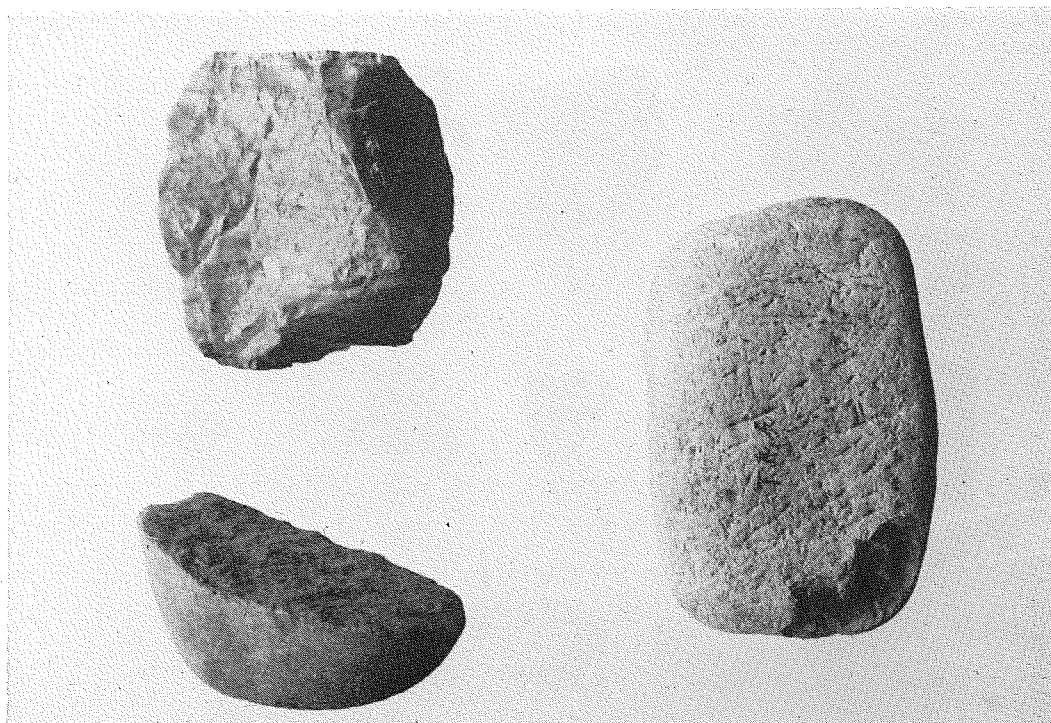
第5図版 川田原貝塚 土器



第6図版 川田原貝塚 土器



第7図版 具志堅新里洞穴遺跡 石器



第8図版 具志堅新里洞穴遺跡 土器